

生態系保持空間
コラム1

川崎大師が造成した大師新道が延伸されて国道409号線(川崎縦貫道)に発展、臨海工業地帯を支える大動脈となった。沿線には工場が林立し、浮島工業地区とを結んでいる。

旧稲荷新田村の鎮守。
境内には赤ん坊を抱いて
乳を飲ませているお地藏
様がある。隣は法栄寺。

昭和6年に竣工。鉄筋レンガの重厚な造りが特徴。現在はその周辺が公園となっている。

日本でのレコード製
造発祥の地。古賀メ
ロディーや美空
ひばりのヒット
曲はここか
ら生まれた。

六郷橋たもとから川崎駅前の
砂子通りを抜け、横浜市鶴見
区（左）の生麦付近へと続く。

旧明治製糖の荷揚げ施設があった場所。親水広場の護岸にある赤黒いレンガが当時のもの。

現在の橋は昭和54年から18年かけて掛け替え工事されたもの。対岸の宮本台緑地公園に大正期に架けられた旧六郷橋の橋門と親柱が保存。

昭和14年に架設の大
師橋にかわり、平成9
年に新大師橋下り車線が完成した。近年
の増加する交通量に対処するため、現
在上り3車線の架橋工事が進行中。

東京湾

かつて「一六郷川」と呼ばれていた多摩川の下流は度重なる出水に悩まされていました。

1600年、徳川家康が六郷大橋を架け、東海道往來の便を
図ったものの、相次ぐ洪水で何度となく橋は流され、1688
年以降は架橋を断念せざるを得なくなりました。近代に入
つて丈夫な橋ができるまで、渡し船が川崎と対岸を結ぶ重
要な交通手段となっていました。

水位の自動計測施設が設置されており、観測された水位データは国土交通省京浜工事事務所に送られ、記録される。

田町河岸の跡地。海苔の採取に使われたベカ舟が係留され、名産品だった梨の出荷場にも使われた。

2階に郷土資料館、4階に海苔資料室を常設。大正期の旧大師河原村の様子や海苔養殖を伝える道具の数々が展示されている。



現在の小松製作所の川縁には“お大師さま(川崎大師)”と旧羽田本村を結ぶ「大師の新渡し」ができた。

川崎市が河川敷の緑化に植栽している植物群。春はデージーやポピー、かすみ草など、秋はコスモス、サルビア、マリーゴールドなどが楽しめる。

明治26年に旧大師河原村で生まれた長十郎梨は、その甘みと病虫害に強いことから、全国に広がった。

多摩川では、

多摩川では、豊かな自然環境を保ちながらみんながきちんと利用できるように、1980年「多摩川河川環境管理計画」を策定し、それに基つき多摩川の河原を8つの機能空間に分けて管理しています。そのひとつが「生態系保持空間」で、むやみな立ち入りを禁止し、貴重な生物などを守っています。なかでもこの多摩川河口は代表的なスポットで、一面に広がる葦原と干潟は生き物の絶好のすみか。カニやゴカイ、トビムシも姿を現し、それらを餌にするカモ、カワウ、サギ、シギ、チドリなどの鳥たちも飛来しています。

川崎河港水門

工場用地拡大の一環として運河建設計画が立てられたのは第一次大戦後のこと。水量調節のために昭和3年に建設されたのが、この日本初の河港水門です。当時、内務省東京土木出張所長だった技師・金森誠之氏

が設計、建設の指揮をとりました。2本の柱の頂上には、川崎の名産である梨、柿、ぶどうをあしらった見事な彫刻が刻まれています。

不況による財政難から運河計画は頓挫しましたが、河港水門はシンボルとして残されました。現在、砂利の陸揚げや多摩川水位調節施設として役立っているほか、その美しさから国の登録文化財になっています。



9:30
小島新田児童公園 集合
田町河岸跡

10:00 ↓
生態系保持空間

10:40 ↓
多摩川河口水準指標

↓

11:20 水神社

11:30 ↓
殿町小学校
(郷土資料館)

↓

13:15
ワイルドフラワー

13:30 ↓
6 六郷水門付近

14:00 ↓
8 川崎河港水門

14:15 ↓
9 明治天皇六郷遡御碑

10 長十郎梨発祥の碑

14:20 ↓
11 旧東海道

↓

12 赤レンガ堤付近